

2012年度研究旅行奨励制度

## アンデルセン童話とデンマークの観光産業

—おとぎの国デンマークにおけるアンデルセンブランドの活用—



13AR149 山内 美郷

研究テーマ	アンデルセン童話とデンマークの観光産業 ーおとぎの国デンマークにおけるアンデルセンブランドの活用ー	
目的地	国名	地域・都市名
	デンマーク	コペンハーゲン・オーデンセ・ロスキレ

研究旅行の目的	
<p>「童話の王様」と言われたアンデルセン。</p> <p>自伝において自らの人生を「一篇の美しいメルヘンであった」と述べた彼の童話は、ほぼ原作のまま今なお世界中の人々に愛され続けている。そのアンデルセンの故郷・デンマークは「おとぎの国」と言われるように街中にアンデルセンが溢れ現在もその恩恵を受けているイメージが強い。しかしアンデルセン童話を研究していく中で、現代デンマーク人はアンデルセン童話をほとんど知らないという話を耳にした。また、アンデルセン童話は彼個人の人生・性格が色濃く表れており、さらに、その当時の社会情勢がアンデルセンを通して表されているという特徴がある。童話にその当時の社会情勢が影響しているのなら同時代の人々には共感されていたように考えられるが、アンデルセンが作品を発表した当時、デンマークでは最初受け入れられず外国で評価を受けてからデンマークにアンデルセン童話が広がっている。これらのことから、デンマークにおいてアンデルセン童話はその中身よりそのブランドが重要視されているように思われる。今も昔もデンマークにとってアンデルセン童話は外貨を稼ぐための観光産業商品でしかないのだろうか。この疑問を今回の研究旅行で探っていきたい。まずアンデルセン童話が150年以上の時を経て今なお世界で愛され続ける理由についてその作品が作られた環境(アンデルセンの家や博物館)を訪れることで探り、さらに、現代デンマークにおいてアンデルセン童話がどのような役割を担っているのか、実際に街・人・モノに触れることで調べたい。</p>	
期待される成果	
<p>アンデルセンが生まれ育ったデンマークを訪れることで自筆の手紙や原稿など貴重な資料を集められるだけでなく、資料からだけではわからないその土地の風土を知ることができる。作者自身の人生・性格が色濃く表れているアンデルセン童話を研究するうえでそれは作者をより理解するための貴重な資料になると言える。そしてこのような文化と産業のかかわりを考えることは、基幹産業がハードからソフトに移行し、ツーリズム産業が国策を担うようになった日本の今後の在り方を考えることにもつながる。また、アンデルセンはグリム兄弟と同時代の人物で、交流もあり、グリム童話第五版にはアンデルセン童話の一つがうかつにも入れられてしまったことさえある。グリム童話を研究する私にとって今回の研究旅行は今後の研究に大いに生きてくると考えられる。創作童話のアンデルセン童話と民族童話のグリム童話は同じ童話の括りにあっても全く性質は異なり、グリム兄弟が概要を形作ったメルヘンをより多角的に捉えるという点でも成果を期待できる。</p>	

日程表（日本発着日程は省略）

	滞在地	行動・調査内容
第1日目	コペンハーゲン オーデンセ	空港からオーデンセへ鉄道移動
第2日目	オーデンセ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アンデルセン博物館</li> <li>・オーデンセ中心街観光産業調査</li> <li>・アンデルセン子ども時代の家などゆかりの地調査</li> </ul>
第3日目	オーデンセ コペンハーゲン	コペンハーゲンへ鉄道移動
第4日目	コペンハーゲン ロスキレ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ロスキレ大聖堂</li> <li>・ロスキレ中心街観光産業調査</li> </ul>
第5日目	コペンハーゲン	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アンデルセンワールド</li> <li>・アンデルセンの住んだアパート</li> </ul>
第6日目	コペンハーゲン	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人魚姫像</li> <li>・ストロイエ観光産業調査</li> <li>・ロイヤルカフェ</li> </ul>
第7日目	コペンハーゲン ロスキレ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ロスキレ大聖堂内部調査</li> <li>・コペンハーゲン中心街観光産業調査</li> </ul>
第8日目	コペンハーゲン	コペンハーゲン出発

## 調査報告

### ・オーデンセ

デンマーク第3の都市であるオーデンセはアンデルセン生誕の地である。ここはアンデルセンがコペンハーゲンへ上京するまでの14年間住んでいた場所であり、彼の基盤を作り上げた地だと言える。

オーデンセの中心部には御影石でできた13個の敷石が歩道に埋め込まれている。その敷石にはアンデルセンの”Solhovedet”（太陽の頭）の切り絵の装飾が施されており、幼少期をオーデンセで過ごしたアンデルセンゆかりの場所をそれぞれ示している。その敷石のある場所を紹介した地図付きのパンフレットが観光案内所でも配布されていた。そのパンフレットには日本語など多言語で書かれており、各国から観光客が訪れていることがわかる。紹介されている場所としては次のようなものがあった。

#### 1. H.C.アンデルセン博物館



アンデルセンが生まれた場所でもあり、当時この地区はスラム街であった。

博物館入り口を始め、館内いたるところにアンデルセンの”Solhovedet”（太陽の頭）の切り絵がモチーフとして使われており、館内では実物も見ることができた。博物館にはその他、多数の切り絵や直筆原稿、遺品など、アンデルセンの生涯をたどっていく形での展示がされ、アンデルセンの作った童話ではなく作者である H.C.アンデルセン自身に重点を置いた博物館となっていた。



アンデルセン作の切り絵

## 2. 黒修道士広場

アンデルセンは少年時代に演劇にのめりこみ、この広場にあったオーデンセ劇場でポスター持ちの手伝いをしていた。後に彼はその劇場でエキストラとしてデビューし、デンマーク王立歌劇場で俳優として生計を立てていくという夢とともに14歳でコペンハーゲンへ旅立つこととなる。

## 3. 救貧院

家が貧しかったアンデルセンは大聖堂近くにあったグラマースクールではなくここで教育を受けていた。

## 4. 洗濯場

アンデルセンの母親はこのようなオーデンセ川の洗濯場で洗濯婦として働いていた。それは寒くとてもつらい仕事であり、お酒の力を借りて過ごしていたそうである。

## 5. アンデルセン像



聖クヌード教会裏のアンデルセン公園にある。1888年に彫刻家ルイス・ハッセルリースによって作られた銅像で、アンデルセンが亡くなる1875年にはすでにモデルとなる草案は作られていたということであった。毎年4月2日にはオーデンセの人々が集まり、花輪を手向けるそうである。1月であったためか、私が訪れたときは人の気配は全く無くとても静かな場所であった。

## 6. オーデンセ刑務所

幼少期の家の近くにある。門衛がこの刑務所でパーティーを開いた際、幼いアンデルセンは両親とともにそれに参加した。しかし、アンデルセンにとって刑務所という場所も、パーティーで給仕をしていた受刑者も恐ろしいものであった。

## 7. 司教の館

俳優という夢のためにコペンハーゲンへと出発する2日前、旅費を稼ごうとこのような館に住んでいたプラム司教をアンデルセンは訪れた。歌や演技、自前の詩を披露し司教の客をもてなすことで旅費を得ることに成功した。

## 8. 幼少時代の家



アンデルセンが2～14歳までを過ごした家。70歳の誕生日にアンデルセン初めての記念額がここに飾られた。童話「雪の女王」はこの家がルーツとされている。現在は自叙伝をもとに当時の家具等が内部に再現され、幼少期に描いた絵も展示されている。その狭さから当時の貧しい暮らしぶりが感じられた。

## 9. 聖クヌード教会

1819年にアンデルセンが堅信礼を受けた。アンデルセンの両親の結婚式が行われた場所でもあり、父親が埋葬された場所でもあった。

## 10. オーデンセ市庁舎



1867年12月6日、アンデルセンは故郷オーデンセの名誉市民に任命され、この市庁舎2階窓から多くの人々が歓喜する様子を眺めたという。現在は市庁舎前の広場に、“Solhovedet”（太陽の頭）の切り絵のモチーフが飾られた花壇が置かれている。

## 11. グレイフライアーズ病院

病院・教会・精神療養所を備えた複合施設で、アンデルセンの祖父やアルコール依存症となった母親が収容されていた。

## 12. オーデンセ城

アンデルセンの母親はときどきお城で洗濯婦として働くこともあり、いつもアンデルセンを連れて来ていた。アンデルセンはお城の庭で他の使用人の子どもたちやフリッツ王子（後のフレデリック7世国王）と一緒に遊んだ。

## 13. 聖ハンス教会

アンデルセンは虚弱な体質から自宅で洗礼を受けたが、生後10日でこの教会の集会に連れて来られ、そこであまりに大きな声で泣いたために牧師に怒られたそうである。

この他にもオーデンセの街の中心部にはアンデルセン童話にまつわる像があらゆる場所に点在していた。「空飛ぶトランク」「卵とおばさん」「ひきがえる」「羊飼いの娘とエント

ツ掃除人」「折り紙の船」「すずの兵隊さん」「親指姫」などがあつた。しかし、像があるだけで標識や紹介は何もないため何の像なのかわかりづらく、写真を撮る人はおろか立ち止まる人すらほとんどいないように見えた。童話の中でも有名な「はだかの王様」の像でさえわざわざそこへ来る観光客はほとんどおらず、通っても指をさしていくにとどまっていた。観光案内所ではそれらの像に関する簡単なガイドブックも販売されていたがデンマーク語のみの表記であり、国外からの観光客向けには作られていなかった。また、観光産業としては土産も考えられるが、街中に土産屋自体ほとんどなく、アンデルセンに関するものはアンデルセン博物館内かその近くにあつた一軒の小さな土産屋くらいであつた。



## ・ロスキレ

デンマーク第二の都市であるロスキレ。同じデンマークでもアンデルセンとは密接なかわりがない土地の例として調査した。(ただし、アンデルセン童話「真珠の飾りひも」にロスキレ大聖堂が登場するという接点はある。)

ロスキレの中心地を歩いた結果、ロスキレは世界遺産であるロスキレ大聖堂とヴァイキング船博物館の二つを観光のメインとしており、街中にアンデルセン童話に関する装飾・土産は何もないように思われた。

しかし、その観光メインの一つであるロスキレ大聖堂内でコペンハーゲンにある人魚姫像の写真が説明書きとともに置かれているのを発見した。それはクリスチャン 9 世の石棺の前にあつた。その掲示、また、聖堂の方のお話によると、このクリスチャン 9 世の石棺周囲に座っている 3 人の女性像は彫刻家エドワード・エリクセンによって作られたもので、コペンハーゲンにある人魚姫像と同じ作者だということであつた。さらに、そのうち左に

座っている女性像"Grief"は人魚姫像と同じ女性、妻エリーネ・エリクセンがモデルとなったとのこと。1911年に人魚姫像がコペンハーゲンに作られたのだが、ロスキレにあるこの3人の像はその2年前に作られた。



## ・コペンハーゲン

デンマークの首都・コペンハーゲンはアンデルセンがオペラ歌手を志して1819年に上京した地である。市内にはアンデルセンゆかりの場所が数多く残されている。特に「人魚姫」の像は世界的に有名であり、観光の目玉の一つだと言える。実際に行ってみるとそれは観光主要地からやや離れた場所にあり、人魚姫像を見るという目的がなければ観光客は訪れそうにない場所であった。私が行ったときは他に観光客はおらず、幼稚園の子どもたちが散歩に来ているだけであった。少し経つと観光客も徐々に増えてはきたが「にぎわっている」というほどではなかった。



この人魚姫像は先にも述べたようにコペンハーゲン観光の目玉になっているが、「世界三大がっかり」の一つに数えられることもある。それは想像より像が小さいことが原因とも言われる。しかしそれだけでなく、背景や周囲の環境も影響しているように感じられた。例えば人魚姫像の背景にあるのは工場や軍艦など。「おとぎの国」といった感じがするものではない。よくガイドブックに「おとぎの国デンマーク」と紹介してあるが、「おとぎ話」の世界観を求めて訪れた観光客にとっては確かに「がっかり」な風景なのかもしれない。また、周囲には人魚姫像以外特に何もなく、像を見に来た観光客をターゲットとした商売はなされていなかった。

中心地には"HANS CHRISTIAN ANDERSENS WONDERFUL WORLD"というアンデルセン博物館もあった。"Believe it or Not"という嘘のような本当の話を集めた博物館に併設されてる。私は昼頃、一時間ほどこのアンデルセンワールドを見て回ったが、他に来場者はおらず、"Believe it or Not"の方が賑わっているようだった。



受付の方に尋ねたところ、アンデルセンワールドの方の来場者は、夏にはおよそ一日 1,000 人以上、冬にはおよそ一日 50 人とこのことで、シーズンによって大きな差があった。先に紹介したように、オーデンセにもアンデルセン博物館があるが、あちらがアンデルセン本人の人生をメインに展示しているのに対し、こちらはアンデルセン童話の世界観も合わせて紹介されていた。また、オーデンセは貴重な資料を展示することでアンデルセンを紹介するより学問的な要素を含んでいたのに対し、コペンハーゲンには蝋人形やクイズ、多くの仕掛けを用いながらより子供向けに作られた、博物館というより一種のアミューズメントといった感じのもので、アンデルセン童話を知らない人でもその世界観を知ることができるものであった。館内にはデンマーク語・英語・ドイツ語での解説が書かれていたが、館内を紹介したパンフレットには日本語版もあり、日本人も多く訪れていることがうかがえる。



人魚姫も仕掛けのある展示がなされていた。

次に、コペンハーゲン観光名所の一つであるニューハウン。ここはアンデルセンが特に気に入っていた場所で、彼が住んだ三つのアパートだったところには記念碑が飾られている。やや高めの位置にあるため知らないと感じづらく、観光案内所でも特に紹介されていない。



コペンハーゲン観光の中心地、ストロイエ。この近くにはチボリ公園があり、それを見つめるかのようなアンデルセン像がその外のアンデルセンストリートにある。この像の周りのマンホールはアンデルセンのシルエットが描かれている。像はなかなか目立つ位置にあるがそこで記念写真を撮っていく人はあまり見受けられなかった。



ストロイエには多くの店が立ち並んでいた。しかし、みやげ物屋をはじめ、その多くの店にアンデルセンに関するものはほとんど見られなかった。アンデルセン像や人魚姫像の置物・ポストカードしかアンデルセン関連のものはなく、アンデルセンを積極的に観光産業として使っているようには感じられなかった。

一方、飲食店ではモチーフとしてさりげなくアンデルセンを利用していた。中でも、ロイヤルコペンハーゲンのショップに併設するカフェではお店のモチーフとしてアンデルセンの切り絵を用いており、店内の装飾やコーヒーシュガーの袋に描かれていた。また、メニューにも紅茶の種類としてアンデルセンの名がつくものがあつた。この店以外にもニューハウンには人魚姫をモチーフにした看板が多く見受けられた。



また、今回、コペンハーゲン・オーデンセ・ロスキレの移動は鉄道を用いたが、デンマーク国内を走る IC などの鉄道切符にもアンデルセンの” Solhovedet”（太陽の頭）の切り絵が装飾として使われていることがわかった。

## 研究旅行を終えて…

この研究をするまではデンマークというと観光本で紹介されているように「おとぎの国」といったイメージがあり、アンデルセン童話を主体とした観光産業が繰り広げられていると考えていた。しかし、今回現地に赴くことで、実際はそのイメージとはやや異なるものであることがわかった。アンデルセンゆかりの地や建築物、銅像や記念碑は数多く残されているものの、その周囲に住む住民はそこへ来た観光客をターゲットとするような観光産業をほとんど行っていなかった。土産物屋でもアンデルセン童話にまつわるものよりバイキングをモチーフとした商品が多く揃えられていた。今回訪れたのが冬だったこともあり、多くの施設が休業・休館しており、この季節はアンデルセンも含め観光産業が積極的に行われていないように感じられた。街中を散策する観光客もショッピングを目的とした人がほとんどであった。

また、アンデルセン童話は発表された当初、デンマークで受け入れられず外国で評価を受けてからデンマークで広がっていった。そのことから、デンマークは当時アンデルセンに対しそこまで高い評価をしていなかったのではないかと考えていた。しかし、実際にはアンデルセンは生きているうちに出身地のオーデンセから名誉市民として表彰されるなど当時から街の著名人として高い評価を受けていた。現在においても住民の生活の中にはアンデルセン・アンデルセン童話があり、それは観光産業商品としてというより、生活の中に溶け込んで、寄り添って存在しているという印象を受けた。

今回この研究旅行を通して、当初予定していた夏の時季には見られないデンマーク観光産業の一面を知ることができた。またの機会に、夏に訪れ、今回休館で見ることができなかった19世紀の町並み残るフューネン・ビレッジやアンデルセン童話の劇などを見るとともに、シーズンによる観光産業の違いについても研究していけたらと思う。